

頭の価値の盛衰記

文 赤瀬川原平

脳というのは怪し気な物体である。筋肉や胃や心臓と違って、どうもその具体性が感じられない。たまに頭痛があると、何だろうこれは、と思うが。

脳のことを考えたのは、心というもののわからなさからだ。脳が頭部にあるのは何となくわかる。学問的にもそういわれている。でも心はどこにあるのか。

「胸に手を当ててよく考えなさい」というが、心臓が心だといわれても、どうも実感が無い。

そう思ったきっかけは、昭和天皇が病いに倒れたところだ。天皇とは何だろうと思いつつ、同時に神様とは何だろうかと思つた。神様はどうも論理ではない。心に繋がっているようなものらしい。とすると、心は体のどこにあるのか。

ほくの頭ではなかなかわからない。結局、

心も頭の中にあるのかとも思ったが、どうもその感じがしない。ではどこにあるのかと考えても、はっきりしない。

そんなころ、発生物学の三木成夫の学説を読んだ。これは本当に目からウロコだった。この人の考えでは、人間の人体を内臓部と体壁部に分ける。生命力のダイレクトな存在ともいえる内臓ぐにやぐにや部分と、それをガードする筋肉や骨の硬い部分だ。その体壁部から手足が伸びて、四輪駆動で移動することになったのが動物だといふ。動くにはセンサーが必要となり、目や耳や鼻やその他が体壁部に発生し、それらをコントロールするための脳が出来た。つまり脳は体壁部に出来たコントロールタワーなのだ。

ほくはそれを読んで、しつに腑に落ちた。やはり心は脳ではなく、内臓の方にあるの

だ。内臓のどことは特定できないが、物を食い、呼吸し、生命活動をする臓器、だけでなく、生命に繋がる自然環境にも、心は一部散在してあるのかもしれない。

それはわからない。はっきりしない。所在がはっきりしないだけではなくて、心は言葉を持っていない。言葉はあくまで脳がコントロールして紡ぎ出すものだ。

これが問題である。心は発言しない。でも発意はする。理屈を超えて、どうしても嫌だとか、どうしてもあの人が好きだとか、それは心から発動する力である。でも何故？ となると、その理由は頭の操る言葉によってしかわからない。つまり心の発意は、頭が通訳する言葉によってしか、外在化しない。

頭はそういう二重権力みたいな位置にいるから、十分な警戒が必要である。誤訳があるし、情報の握り潰しもあるだろう。頭は有能で、科学の発達を促し、便利な世の中を作ったけれど、ずるいところがある。つまり計算高い。たとえば人間が生き埋めになり、一週間後にやっと救助されたとして、水を一口飲ませてもらう。そのとき「心から感謝します」とはいうけど、「頭から感謝します」とはいわないだろう。そう

いうせつば詰まった場面で、心と頭の性質の違いというものを如実に感じる。

そのころオウム的事件というのが起り、人間が頭だけを崇拜した結果はこういうことになるのかと思った。あれは頭が体を完全に支配下に置いてしまった事件だった。内臓的な発意、つまりおいしいとか、好きだとか、趣味にかかわるような「些細なこと」は一切踏み潰されて、ねばならぬ、という頭の人工の考えにすべてが覆いつくされると、こうなる、という顕著な例だと思う。

ぼくだって若いころは頭を崇拜していた。思想に引きずられて、論理展開の見事さに脱帽して、経験による知識のようなことは、はるか下に見ていた。たとえば野球解説に元プロ野球選手が出て話をしても、なーんだと思っていた。ただの経験者か、と思うだけだった。

でもこちらが歳をとり、ということとは挫折を積んで、感覚のディテールが細見できるようになってくると、むしろ経験者の話の方がはるかに面白い。論理展開はとくになくても、ときどき観察の角度の微妙さがキラリと感じられて、むしろそれが得難いものだと思えるのである。